

W・B・イエイツと歴史の詩学

銭 本 健 二

一 生きた歴史

一九二〇年前後からイエイツは『幻想録』(A Vision)を執筆するに当って、歴史特に世界歴史への関心を深めていった。『幻想録』の中の第三卷「白鳩か白鳥か」は一応その集大成となつてゐる。そして後期の詩や特に劇作の柱として、彼の歴史理解が重要な役割をはたすことになるが、そうした歴史観が形成され、作品化されるようになるのが、一九二五—六年頃のことである。彼の歴史観について、教育と関連させながらわかりやすく説明した雑誌記事がある。『アイリッシュ・ステイツマン』(The Irish Statesman)に一九二五年一月五日と一二日に続けて発表された「子供と国家」(“The Child and the State”)と題する記事で、アイルランド上院議員として、一九二五—六年にいくつかの小学校を視察し、教育改革の問題に深くかかわつた時期に書かれたものである。イエイツは上院議会において教育に関する三つの演説を行なつてゐるが、そのうち二つは教育施設改善を含む教育整備を求めるものであるが、一九二六年三月二四日のスピーチは、教育の中心が子供にあつて、その他の目的に従属されてはならないとその基本姿勢を明らかにしている。⁽¹⁾

さて「子供と国家」の中で、イタリアの哲学者(のちにムッソリーニ政権の教育相)ジョバンニ・ジェンティーレの『教育の改革』に共鳴して、アイルランドの国家目標である国民的統一と教育の役割についていくつかの提言を行なつてゐる。ジェンティーレについてはイエイツは一九三〇年頃、ヴィーゴやクロッチェ、バークレーと関係づけながら、著しい右傾化をみせながら論じられるようになるが、ここではその問題には触れない。まずアイルランドの「新しい溢れる生命」の到来にもかかわらず、教育の不備のためにそれに応ずる力がないことを嘆き、教育の柱を、①ゲール語によつて守られてきた国民的伝承文化を伝える、②バークレーとバークの哲学に国民教育の基礎を置く、③宗教や市民権と義務を不可分のものとして統合した歴史教育の確立の三点である。それぞれについて、具体的に考察してみることにする。

ゲール語の義務教育化の賛否については、現在に至るまで国民的議論であるが、イエイツも「強制的ゲール語」という論説を一九二四年八月二日に同じ雑誌に発表しているが、賛否両方の立場を代表する二人の人物に論争させる形式をとつて、イエイツ自身の立場を明らかにしていな

いが、その有効性についてはどちらかと言うと否定的である。ここでも
 アイルランドの伝承文学の古典を多く英訳して、幼い時期から与えるこ
 とを推奨している。だがゲール語教育の必要性は強く感じていて、後に
 『汽罐の上で』(On the Boiler)の一篇「革命後のアイルランド」で、
 「ギリシア語とゲール語と数学、そしてたぶん欧米語一語だけを教えれ
 ばよい」と思いついた提言をし、ラテン語をはずして、ゲール語とギリ
 シア語を直結することを構想して、その根拠を次のように説明している。

古代のアイルランドの詩は無形の母胎の中に眠っている。一方ギリシ
 アの詩人たちはそうした夢の豊かさを保ちながら完全に目醒めてい
 る。眠りは底の知れないものであり、目醒めは頂きを知らない。アイ
 ルランド語は私たちの子供に足下の大地への愛を教えるが、ギリシア
 語だけが一致と強い集中を教える。⁽⁵⁾

アイルランドの想像力の目醒めと生命の表現にはギリシア語の力が必
 要であることをいかにもイエイツらしく説いているが、一方英語の廃止
 を奨めているわけではない。「アイルランド人は母の膝で英語を習ぶ、英
 語は今では母国語であり、特別の変化は長い不毛の時代をもたらすだろ
 う」と語って、ゆるやかな変化を望んでいる。むしろゲール語と英語と
 という二つの言語による二つのアイルランドがたがい他方を滅ぼさない
 で統合されることを求めている。

生きているものを守り、ゲリック・アイルランドとアングロ・アイ
 ルランドという二つのアイルランドを救い、そしてどちらもその誇り
 を失わないように統合せよ。私たちの眼前で生きているのだから、世
 界の大きな問題、バークレーの心にあるヨーロッパ精神の再生とバー
 クの心にあるヨーロッパの秩序の回復を習べ。

あらゆる国は鏡に映されれば全世界であり、私たちの鏡は二重である
 だけに非常に明るく透明である。⁽⁷⁾

バークレーとバークの哲学については、先の拙論⁽⁸⁾で記憶と関連させて、
 その認識論について論じてきたが、イエイツは二人の哲学と、自由より
 も国家的統合と秩序を与え、抽象的思考よりも想像的具体的な訓練を求
 める精神活動を教育目標としているジェンティール⁽⁹⁾の教育理論がイエイツ
 ツの中で結びつく。先の引用に続けて、イエイツは宗教教育に言及する。
 誇りが重荷にならない限り誇ることを恐れるな。哲学者ジェンティ
 レの造ったイタリアの教育制度を習べ。ここでは宗教でさえ抽象的で
 はなく、イタリアの聖者と思想家の心と生涯によって習ばれている。
 それはただちにイタリアの歴史の一部である。⁽¹⁰⁾

歴史教育について「子供と国家」の結論部分において述べられている。
 幼児から大人へと成長していくすべての子供は想像力の中で、それ自
 身の民族の歴史を通り、世界史のある事柄を通り、その歴史において
 宗教が演ずる最も力強い部分を経てゆくべきである。大人になれば子
 供に自分自身の道を進ませるが、子供に全体的な遺産をもたせるのが
 私たちの役割である。それはただ単なる思想、美術学校の棚にあるグ
 レコ・ローマンの石膏のように抽象的なものではなく、子供の感情生
 活の一部となるものである。⁽¹¹⁾

イエイツが考える歴史教育の特色は、①歴史を子供の成長に合わせて
 自国の歴史―世界の歴史―歴史における宗教の教育を考えている、②世
 界歴史の重視、③歴史における宗教のはたす役割の重視をあげることが
 できる。世界における「ある事柄(something)」という表現は後に見る
 ように歴史的転換点となる出来事を示している。後年に書かれた「革命

後の「アイルランド」では歴史教育はもつと「感情生活」の中に引き寄せられ、家庭教育の一部にされる。

英語、歴史、地理、そして楽しく易しいものは、すべてのうちで最も重要であるが、これらは父母、古くからの伝統、子供自身の読書によって教えらるべきである。⁽¹³⁾

一九二六年二月の聖オッタラン校の視察をきっかけに書かれた詩「学童の間で」(“Among School Children”)はイエイツの教育と歴史理解が各連の枠組となっている。第一連の導入に続いて、一人の少女(モード・ゴン)の姿が目前の少女から連想され、その成長の過程、レダの受胎からルネサンスの芸術家によるレダの造形(グレコ・ローマンの石膏像)、そして現在の一人の老いた女の姿へと引き寄せられ、一人の個人史が文明の消息と重ねられる。第二連から第四連までがレダと白鳥の神話が枠組となっている対して、第五連から第七連までの三連がそれに対応して、目前の感情生活の中に生きている、聖母子の姿からその石化した崇拜、プラトンやアリストテレスやピタゴラスによって基礎づけられた抽象的思考の文明が深い嘆きのうちに語られる。もちろん聖オッタラン校の尼僧や子供たちの母親たちの日常に引き寄せられていて、聖母子像はその枠組でしかないのであるが。

そして最終連で生きた歴史の営みがアイルランドの風土と伝統を象徴する肉体と樹木によって豊かに歌われるが、その中の「輝くまなざし」への呼びかけは神秘的な魅力をもつ。これは千年王国的な創造的力への全的顕現を表現している。パークレーの認識論における創造的知覚、「神は認知することで創造する」⁽¹⁴⁾のひそかな暗示である。

二千年を周期とする二つの文明の歴史の始源に神聖受胎を置く象徴的

W・B・イエイツと歴史の詩学(錢本)

歴史観は以上の例に見られるように、予表論的照応によって、アイルランドの風土、伝承文学のモチーフの中に詠み込まれてゆく。ダグラス・ハイドが蒐集した『コナハトの宗教歌』(The Religion Songs of Connacht)の中に含まれている「桜の木のキャロル」⁽¹⁵⁾をカトリックの一派が神を昌瀆するキャロルであると非難し、この歌を引用した友人A・E・に圧力をかけたことに抗議した「思想の頑固さの必要」という文章がある。これは一九二六年二月に『ダイヤル』(The Dial)に発表されたもので、神聖受胎を全的神秘であると理解したうえで、「私は(カトリック)教会的な意味で神聖受胎を信じてはいないが」と前置きしながら、再臨のキリストを受胎したと信じて出産したアイルランドの農夫の娘たちの実話を紹介し、次のように語っている。

もしこうした母親が素朴な田舎娘として、凝り固まった意見をもった人々の間で生活しているのを想像すると、このテーマは情緒のある哲学的なものに成長する。私自身もこのテーマによるシナリオをもっているが、どうしても劇に作り上げることはできないであろう。なぜなら私には十分方言が書けないから。――(中略)レノックス・ロビンソン氏と私は神聖受胎を理解したいと思っているが、私たちは、それを新しい状況に置いてみるまではいかなる歴史的出来事も理解できないと思っている。私たちは聖書のこの物語を読みながら成長した。聖母はカトリックの所有物ではない。彼女は私たちの想像力の一部なのだ。⁽¹⁶⁾

そしてこうした想像力の劇を否定することは信仰それ自体を不可能にすることになると述べ、同時代の想像力の中に育った神聖劇を列挙している―ストリンドベリーの『スプータ・ソナタ』、ジョイスの『ユリシー

ズ』、シングの『聖者の泉』他。アイルランドに生きた宗教文学の復活を求めているが、それは宗教をその統合の中心に置いたイエイツの歴史観が大きく影響し、『学童の間』もそうした創造の一つとして、イエイツにとつて一つの方向をはっきりと示す作品であつたと思われる。

イエイツの詩人としての歩みをふりかえつてみると、アイルランドの歴史に関する関心は、アイルランド固有の文化の基盤として民俗伝承に注がれた。アイルランド文芸復興運動の教育的意味が「子供と国家」の中でも第一に取り上げられている。伝承作家ウィリアム・カールトンの作品を生きた歴史として賛美している言葉にイエイツの素朴な変らない姿勢を見ることが出来る。

一 国家の歴史は議会や戦場にあるのではなく、市の日や祭日に民衆がたがいに語り合うことの中なかや、彼らが耕し、言い争い、巡礼に出掛ける姿の中にある。こうしたことをカールトンは記録したので。¹⁶

こうしたナシヨナリズムを基盤にした復古的姿勢から現実の政治に一歩踏みこみ、また同時に表面的な政策論争を超えた政治的力学を具現したのは、先の拙論で論じたように一八九一年十月六日のパーネルの死であつた。それはあたかも政治的分裂を解消するための犠牲のように、「パーネルの失脚（と死）」が想像力を実際的な政策、農地問題の嘆きや政党的敵対から解放し、それを想像的ナシヨナリズムに変えていった¹⁷とその転機について述懐している通りである。一九三二年のアメリカでの講演旅行で、この事件をアイルランドの歴史を区切る「四つの警鐘」の一つに数え上げているが、イエイツは歴史をこうした象徴的事件や人物の人格性によつて解釈し、意味づけるようになる。特に先にあげた神聖受胎と犠牲（の王）のモチーフは作品を構成する核になる。その他「四つ

の警鐘」の一つである一七九八年にアイルランド国内の蜂起に呼応して、フランス軍が侵入し、結局失敗に終つた事件は革命劇『キャスリン・ニ・フリーハン』（二九〇一年制作）の背景をなし、独立運動家モード・ゴンにキャスリンの役をふりあてて、独立運動にかけつける「赤い頬の者たち」を何度でも回想すべき歴史の象徴として、次のように歌われる。

彼らはいつまでも記憶されるだろう

彼らはいつまでも生きているだろう

彼らはいつまでも語りつづけるだろう

人々はいつまでもそれをきくだろう

こうしてアイルランド固有の悲劇的な事件によつて歴史を区切ることから、世界的な歴史について象徴的な出来事や人物によつて解釈するより大きな場に立つことで、その歌いぶりは象徴性を強めていく。それは終末的な再臨と神聖受胎そして犠牲のモチーフにしほりこまれてゆく。そして一方でそうした歴史観に抵抗するように、超越的な存在体験が結婚のモチーフによつてくりかえし語られ、イエイツ後期の悲劇的アイロニーの幅を広くしていったと考えることができる。

二 神聖受胎

イエイツの歴史観の確立の時期を一九二五年前後に置いたが、それ以前の作品の中にも、もちろんその萌芽を認めることができる。「三博士の礼拝」(“Adoration of the Magi”)は、キリストの時代の終りにあつて、新しい顕現再臨を求めて旅をし、パリの淫売宿で一角獣を生む女に出会う物語である。¹⁸白鳩でも白鳥でもなく一角獣によつて新しい時代が始まるというモチーフは、グレゴリー夫人との合作になる『星から来た一角

獣』(*The Unicorn from the Stars*) (一九〇七年執筆) に受け継がれ、予言者ヨハネのようなマーティンの言葉で表現される。

ジョン神父：自然は巨大な眠りだ。その夢には危険で邪悪な精霊がいる。しかし神は自然を超えている。自然は闇だが神はすべてを明らかにする。神は光だ。

マーティン 私は一角獣が私の夢の中で足踏みしているのを見た。彼らは世界をくだいた。私も破壊することになる。破壊こそ使者が語った言葉だ。

ジョン神父 破壊するですと。

マーティン 再び古い混沌のわきたつ生命を、かの古き輝きを取り戻すために。

こうしてマーティンは「古代の荒々しい大地を再び取り戻すこと」を夢見て死んでゆく。マーティンが洗礼者ヨハネに対応するが、この作品の規模をもっと拡大し、安定した作品にしたのが『役者女王』(*The Player Queen*) (翌一九〇八年執筆)である。マーティンと同じように予言者の役割をもつセプティマスは、「キリストの時代が終り、新しい摂理の時代が来た。新しいアダムの時代、一角獣の時代が来た」と宣言するが、時代を実現する力はなく、一角獣と交わる歌姫デシマが聖母マリアのパロディとなって、新しい時代を生み出す⁽¹⁹⁾。この作品がひとつの笑劇にしたてられ、詩篇「一九一六年」のような内乱の時代の混沌を悲劇的に歌っているのと対象的であるが、決して軽くはなく、「事物がバラバラになり、中心が保てなくなる、全くの無秩序が世界にぶちまけられ、血に濁った潮が広がり、あらゆるところで無心の儀式が溺れる」(「再臨」)

W・B・イエイツと歴史の詩学(銭本)

全くの失われた時代を描く乾いた不条理の劇作法である。歴史も愛と憎しみだけで向きを変える人間劇になぞらえられる。

歴史は私にとって時代(エポック)にはつきり切ること古典的な三一致の法則を守っている一人の人のドラマのように見える。この人が憎みあの人⁽²⁰⁾が愛するたびにあちらに向きこちらに向きを変えてゆく。

こうした不条理な演劇性が神聖受胎と犠牲という歴史の結び目の中で現代の神秘劇に具体化され、イエイツ後期の傑作となったのが、『白鷺の卵』(*The Heron's Egg*)である。

イエイツのこうした作品を見ると、歴史の実質が一人の女の受胎と一人の人間の誕生の上に理不尽においかぶせられている、またそれに足るだけの見つめられ方がされていて、そこにイエイツのいう宗教的歴史観がある。「とどろき流れるあらゆる流れが一つの針の穴から生れた」(「針の穴」*"A Needle's Eye"*)その一点を終末または循環の起点として見つめることに腰をすえて、しかもそれを小さな針の穴のままに描いて自己聖化を行わない。こうした誕生の見つめ方は、イエイツの長女アンの誕生(一九一九年二月)や長男マイケルの誕生(一九二一年八月)といった私的な出来事とも内的かかわりがあるかも知れない。「わが娘のための祈り」(*"A Prayer for My Daughter"*)ではレダから生れたヘレンが一人の娘の行末として語られ、「わが息子のための祈り」(*"A Prayer for My Son"*)では、キリストに呼びかけながら、母マリアと子イエスを人間の背だけのままに表現する。

ヘレンは、選ばれて生れたがために人生を平板で退屈なものにみなし

あとではばかから多くの憂き目に会わされた

あの泡から生れた大いなる女王は
父なし子であるばかりに道をはずれ
わに足の鍛冶屋を亭主にした

「わが娘のための祈り」

あなたは日々無からあらゆるものを作り
朝の星々に歌うことを
教えることができるが

あなたの最も単純な願いを伝える
明瞭な言葉に欠けて

女の膝で泣き叫びながら
肉と骨のあの最悪の汚辱のすべてを知った

あなたの敵の手先が駆けまわる
あらゆる町を通りぬけて
聖書に偽りがなければ

平坦地や荒地、沃土や荒野を急ぎ
一人の女と一人の男が

危険が過ぎるまで
人間の愛を守ったのだ

「わが息子のための祈り」

自分の子供をヘレンやイエスに重ねることは、祈りであれば自然であるが、時代の混乱が深まり、終末に向って歴史が「いるかの泥と血」の潮となつて流れる時、娘や息子の小さな生の切実さによってヘレンとイ

エスを引き寄せ、それに血肉を与えた。そこには一九八六年に発表された「秘密のバラ」(“The Secret Rose”)におけるような新しい時代の到来を待つ黙示録的明るさよりも日常の生に重点が移されている。

一九一九年に発表された「再臨」(“The Second Coming”)はイエイツの歴史観の図式スキームを提供する予言的な作品であり、ロシア革命に刺激されて書かれたのであるが、一九三六年四月八日のエセル・マニン宛の手紙で表明されている通り、ロシア革命とドイツのナチズムなど現実の政治への理解が深まるほど政治への恐怖はつり、この作品で表現した終末への確信は一層強くなる。⁽²¹⁾そしてこの延長線上に「レダと白鳥」(“Leda and the Swan”)があり、この作品が強い政治的動機で書き始められたことは知られている。⁽²²⁾それが政治的要素が排除され、女と聖鳥に集中して、しかもその女の中に時代の変革を生きる者の問題を投げかけている。⁽²³⁾白鳥の力と重さの下で苦痛と歓喜にうめきながら、神聖なものの知識を身につけることはない。心もとない困惑のままに投げ出されている。後半、劇『復活』(Resurrection)の草稿段階にすぐ引き継いで書かれた「神の母」(“The Mother of God”)もまた「あらゆる恐怖の中の恐怖、私の胎内の天球」におののきながら、赤子イエスを「この肉体は何なの」といぶかしむことしかできない母マリアに転換の時代を生きるすべての人々の思いがこめられている。第二連の「すべての平凡な女」⁽²⁴⁾という表現に落着くまで“common”という言葉にこだわって、日常性をきわだたせるためにさまざまな表現を工夫していることは興味深い。⁽²⁵⁾それが第一連の啓示の激しさと十分に均衡して、第三連の問いをより手応えのあるものにしていく。一九三〇年の日記にあるように、マリアの神聖受胎を「人を超えたところから来て、空虚(処女マリア)を母にし

た始源的な顕現⁽²⁶⁾」ではあるが、イエイツはそれをすべての人々のものにしてしている。その意味でも宗教的詩人と呼んでよい。

三 犠牲の王

『幻想録』執筆の素材となった夫人の自動速記のノート五〇冊とそれよりは少ないがかなりの量の夢の記録をもとに一九二五年に初版が出版されると、数週間後にシュペングラの『西洋の没落』の英訳本が出版される。その驚くべき類似に驚かされたこともあって、その後多くの哲学書や歴史書を耽読し、『幻想録』に手を入れ始める。それらの書物のうちイエイツの共感をよんだ主なものをあげると、シュペングラ以外に、ヴィーコ『新しい学問』、ヘーゲル『歴史哲学』他、フロベニウスの旅行記、ヘンリー・アダムズの教育論、H・G・ウェールズ、トインビーの歴史書をあげることができる。

ヘーゲルの『歴史哲学』における二本の柱、精神の自由な自己表現の形態として歴史を見、歴史に「人格」の働きを認めることと、ヨーロッパ史を超えた世界史における地理的基礎の重要性を指摘することに共感している。しかし一方、世界史を世界の究極的な目的に沿って実現する想像的理性^{イデア}の産物と考えるキリスト教的な摂理の理念には強く反対している。また風土論においても、その基盤としての自然をアジア的と見ることは同意しても、ヘーゲルがアジア、ギリシア、ローマ、ゲルマンに区分し、それをそれぞれ幼年、青年、成年、老年（成熟）という風に進化発展した形態と説明することに反対している。「私はいかなる文明もその絶頂の時是对等だと思ふ」⁽²⁷⁾

またシュペングラの形態論的な歴史解釈と世界像を象徴的なものに

W・B・イエイツと歴史の詩学（錢本）

よって表現し、解釈する方法はヴィーコやフロベニウスと共にイエイツもまた採用した歴史解釈である。そしてまた文化から文明（石化）へと生長―死滅するという生命観もまた共感させられた。イエイツもまたニーチェの影響を受けて、十八世紀以来の歴史を否定する。

ホップズによつてうちたてられ、百科全書派とフランス革命によつて一般化された個人主義的で扇動的な運動の後には、私たちは数世紀の間、二度と作物を育てられない疲弊した土壤しかもたない⁽²⁸⁾。

こうした理性によつて石化した歴史観に対抗して、力動的でしかもヨーロッパ中心の歴史観を超えた歴史を見ようとしたのもトインビーの姿勢であった。そしていくつかの文明の盛衰に共通した類比性を発見して、それをいくつかの文明単位に分類統合して説明した。こうした一連の歴史家との出会いが、イエイツにわがままな栄養摂取の機会を与えた。ここでは歴史の転換点における犠牲の問題にしぼって考えてみたい。

キリストの受難を歌った最初の詩（一八九六年に発表）「受難の苦しみ」(“The Travail of Passion”) はヒエロニムス・ボッスの絵のように図像学的な構成をもつ技巧的作品であつて、アイルランドの農民の間に伝承されている救済の戦いの夢を描いた「黒豚の谷」(“The Valley of the Black Pig”) と共に魅力的ではあるが伝統的形象に収まった作品である。前者はもともとダイアナ・バーノンにあてた恋の唄から発展したもので、イエスの受難も恋の苦しみを表わす自己劇化の技巧でしかないからであろう。こうしたイエイツの態度はパーネルの死や一九一六の復活祭蜂起による知人たちの処刑などアイルランドの独立運動と世界の転換への予感によつて大きく変えられていった。

犠牲について書いた最も早い文章は、自伝中の一九〇九年の日記の抜

粹に見出すことができる。それは詩人A・E・を中心とした集まりで論じられた。

私たちは自己実現と自己犠牲を論じた。彼は古典時代の自己実現は終ったが、キリスト教の自己犠牲の勝利が世界を暗黒時代に投げ込んだと言った。私は彼に三日間「自分自身のための犠牲」として、深淵の上につるされた北欧の神のことを思い出してもらい、両者は和解しないわけではないことを示した。しかし彼は答えた「ハートマン卿は魂は自分を失なってまで、何か良い目的のために自己を犠牲にするかどうかの問題を論じている」と。そこで私は「それこそ私の『キャスリーン伯爵夫人』の問題でもある」と言うと、彼は「それ以上に国家がその犠牲をしようか問題だ」と言った。彼はアイルランドのことを考えていたにちがいない。⁽²⁹⁾

キリスト教では、東アジアで哲学だったものが生活になり伝記になり、劇になった。一つの劇も創作の同じ過程をたどる。最初それが心理的な深さをもっていれば、哲学的な言葉を使って述べることが出来るものすなわち観念の束がある。たとえば私の『キャスリーン伯爵夫人』はかつて、魂は良い目的のために自己を犠牲にできるかという道徳問題だった。しかししだいに哲学は消えて、ついには耳に入る哲学はそれがあつたとしてもせいぜい一人の登場人物の表現するものになつてしまう。⁽³⁰⁾

もし人がその全存在であるようなもう一つの宗教体験を示すことができるとすれば、人はその全存在をささげなければならぬし、そうならば彼はキリストになるだろう。彼だけが自己を与えることができる。⁽³¹⁾

古代芸術は論理的帰結から、一つの男、一つの女の形の創造に至る。ある種の神化によってあらゆるエネルギーとあらゆる情熱の能力をクリシュナ、キリスト、ディオニュソスのような型に結集する。——（中略）——それ（現代芸術）は強力ではあつても散文的で、「分裂に墮す」ことを喜び、「復活して一致に至る」ことを喜ばない。⁽³²⁾

この間の議論をふまえながら、『キャスリーン伯爵夫人』を発展させる劇の構想すなわち『役者女王』が執筆されていったことをうかがわせる内的証である。

『幻想録』におけるキリストを中心に犠牲について関連個所をひろつて、簡単な注解をほどこすことにする。

それぞれの相に見出せる二つのタイプの人間がいる、それは「犠牲」と「賢者」と呼ばれ、前者は殊に情緒的であり、後者は殊に知的である。：彼らは第八相と二十二相の色調の交代に対応して交代する。⁽³³⁾

イェイツは前者を歴史の運動をうながす二つの色調のうち「対抗の色調」、後者を「始源の色調」に属するとする。⁽³⁴⁾

オイディプスは四つの聖物の真中の大地に横たわり、死者が洗われるようにそこで洗われ、そこを通過してテセウスと共に森に入り雷鳴のただ中で、愛に裂かれた大地が口を開けると、魂と肉体と共どもに大地に沈んだ。私は立ったまま十字架につけられ、抽象的な空に魂と肉体と共どもにあがつていったキリストがこれと均衡するものと思いたい。⁽³⁵⁾

オイディプスの死を愛と大地への回帰、キリストの昇天を抽象と天への回帰ととらえている。

キリストとオイディプス、また名前を入れかえてジェノアの聖カタリ

ナとミケランジェロとは、一つの量りの上の二つの量り皿、シーソーの二つの棹尻である。二千年余りで世界に何ごとか(something)が起ると、一方が聖なるものに、他方が俗なるものに、一方が賢く、他方が愚かに、一方が美しくなると、他方が醜く、一方が神聖になると、他方が悪魔的になる。量りの傾きや角度を正確に測り、そしてその何ものかの到来の日を確定する算術か幾何があつてもよいではなからうか。⁽³⁶⁾

歴史の基本構造、二つの力の相対性、そしてその何ものかの到来すなわち終末を啓示する出来事がイエイツの歴史解釈を証すことになる。二つの力はここでは機械的に全く相対化されて説明されているが、イエイツはイエス・キリストの時代よりも次の時代の始まりを待望している。イエス・キリストには私の絶望は理解いただけでない。彼は秩序と理性に属している。⁽³⁷⁾

数年前、この発見をして、「第十五相の神秘を護持する紋章的支えについて」最初の興奮で、ある詩行⁽³⁸⁾を書き、一方をスフィンクスに他方を仏陀にたとえたが、私は仏陀のかわりにキリストを置くべきであつた。⁽³⁹⁾

イエイツの歴史観では、スフィンクスは対抗性の色調を象徴し、仏陀は始源性の色調の象徴であるが、キリストを置く方がここ四千年の歴史を一对と考える時、ふさわしいであろう。

「一つの運命によって結びつけられた象徴的子供の誕生の表現として車輪を考えてみると」、私たちはキリスト教の教会暦に象徴されるとおりに、キリストと聖ヨハネの生涯を再生してみると、キリストは春に生まれ、真冬に生れた、すなわち喜びのうちに生まれ、嘆きのうちに

W・B・イエイツと歴史の詩学（錢本）

生れたのだ。そして聖ヨハネは秋に生まれ、真夏に誕生した。すなわち悲しみのうちに生まれ、喜びのうちに生れたのだ。コヴェントリー・パトモアが教会の権威者たちにキリストを超自然の愛、聖ヨハネを自然の愛と呼ぶように要求し、レオナルドがディオニュソスを聖ヨハネのように、聖ヨハネをディオニュソスのように描いているのに気付いて喜んだのだ。⁽⁴⁰⁾

キリストとヨハネの対称は現代の形態論的神話学でも認められた構造である。⁽⁴¹⁾

たしかにその日〔春分、ローマ暦では三月二十五日〕はローマ帝国中を奇蹟だと思わせるほどシーザーの暗殺の日に近く、ギリシアの運命論〔大年〕に比べられなければ、奇蹟中の奇蹟であるキリストの架刑に近かつたのである。⁽⁴²⁾

キリストとシーザーの対称については聖書はもとより、一九〇九年の日記に、ルネサンス文化を解釈して、「自己認識に基づかず、他の自我―キリストかシーザーの認識に基礎を置き、繊細な誠実ではなく、模倣的エネルギーに基礎を置く」文化として、イエイツの反自我の一人として同等にも扱われている。

啓示が訪れる時、運動競技者と賢者が合体する。初期のキリストの彫像はアレキサンダー大王の神格化された像に似せて造られた。：彼〔キリスト〕は完全な肉体の男として死なねばならない。「始源性」の力が「対抗性」の人類に及ぶにはこれしかないためである。⁽⁴⁴⁾

運動競技者とはもちろんアレキサンダー大王であり、賢者は先に見た通りキリストである。キリストの神格化は時代の転換点にあつて、前の文明の特質を模倣しながら広がっていったのである。イエスの中にある

W・B・イェイツと歴史の詩学（錢本）

- 十三日と草稿の「夜半の夢」にして書き始められて完成稿に至る過程はMemoirs, pp.272—75を參照。
- (24) Curtis Bradford, *Yeats at Work* (Southern Illinois U.P., 1965) pp.114—5.
- (25) *Ibid.*, pp.117—19.
- (26) *Ibid.*, p.126.
- (27) *A Vision*, p.206.
- (28) Joseph Hone, *op. cit.* p.362.
- (29) *Autobiographies*, pp.465—6
- (30) *Ibid.*, p.468
- (31) *Ibid.*, p.484.
- (32) *Ibid.*, p.501.
- (33) George M. Harper and Walter K. Hood, *A Critical Edition of Yeats's A Vision* (1925) (Macmillan, 1978) p.52.
- (34) *Ibid.*, Note, p.17.
- (35) *A Vision*, pp.27—28.
- (36) *Ibid.*, p.29
- (37) *Ibid.*, p.41
- (38) “The Double Vision of Michael Robartes”
- (39) *A Vision*, pp.207—8.
- (40) *Ibid.*, p.212.
- (41) 山口岫暎『文壇の巨匠』(朝野書局)
- (42) *A Vision*, p.254
- (43) *Memoirs*, p.164.
- (44) *A Vision*, p.273
- (45) *Ibid.*, p.275.
- (46) George M. Harper and Walter K. Hood, *op. cit.* Notes, p.50.
- (47) *A Vision*, p.273.
- (48) *Ibid.*, p.136—7.
- (49) *Ibid.*, p.178.
- (50) Cf. George M. Harper and Walter K. Hood, *op. cit.*, Notes, p.29.
- (51) *A Vision*, p.67
- (52) *Ibid.*, p.268
- (53) *Explorations*, p.336.
- (54) *Letters*, p.887